シャルル・ボードレール著

『悪の華』初版本について

教養部助教授　沼　田　五十六

ボードレールの略歴について

ボードレール（本名シャルル＝ピエール・ボードレール）は、1821年にパリで生まれた。一部の批評家が言うように、父親62才、母親28才、34という年齢差の両親から生まれたボードレールに憂慮すべき劣性遺伝があったかどうか定かではないが、彼自身、自己の性格的欠陥はこの年齢差に由来すると思っていた節がある。1827年、ボードレール６才の時、父フランソワが他界し、翌28年、母カロリーヌは、後に将軍の地位にまで昇りつめる軍人オーピックと再婚する。７才の少年にとってこの結婚は一種の母性の消失と映ったに違いない。官職に就くことを希望する両親の意に反し、彼は1840年頃より文学者たちと交わるようになり、文学の世界で身を立てる決心をする。1842年、丁年に達した彼は、実父の遺産７万５千フラン（現在の邦貨にして優に４千万円を越すとみられる）を相続するが、ダンディな放蕩生活が災いして、２年後には準禁治産者となり法定後見人を付けられてしまう。1845年に最初の美術評論集『1845年の官展』を刊行し、翌年刊行した『1846年の官展』の裏表紙に詩集『レスボスの女たち(Les Lésbiennes)』の近刊予告が掲載されるが、この表題は、いま一度『冥府(Les Limbes)』と変更された後、漸く1857年になって『悪の華(Les Fleurs du Mal)』の表題に結実して刊行されるのである。最初の近刊予告から10年以上も経って公表された経緯については、後でまた少し触れるとして、『悪の華』初版を刊行するまでのボードレールは、雑誌や新聞に美術評論や文芸時評を発表する傍ら、エドガー・アラン・ポーの翻訳に打ち込んでいた。その成果として1852年に『エドガー・アラン・ポー、その生涯と著作』を雑誌に公表し、1856年にはポーの翻訳集『異常な物語集』を、翌57年には『続異常な物語集』を刊行することになる。『悪の華』の詩人はアラン・ポーの良き理解者でもあったわけだが、同年６月25日に件の詩集の発売が開始される。翌７月７日、内務省は『悪の華』の著者に宗教道徳および公共道徳に対する紊乱の嫌疑ありとして検察庁に捜査を促し、10日後には検察庁によって著者および出版者の尋問と出版物の押収が開始される。同年８月20日、パリの軽罪裁判所で公判が行われ、即日、公共道徳紊乱の廉で、著者に300フラン、出版人プーレ・マラシとド・ブロワーズの両名にそれぞれ100フランの罰金刑と詩６篇の削除（これらの詩篇は「禁断詩篇」と呼ばれている）の判決が下された。1858年頃より財政的窮乏に加えて、歩行困難や胃腸障害に悩まされるようになるが、1861年には初版と同じプーレ・マラシ・エ・ド・ブロワーズ書店より『悪の華』第二版を刊行する。これには勿論「禁断詩篇」は含まれない。1864年、前年ベルギーに亡命していたプーレ・マラシの後を追うかのように、ボードレールはベルギーのブリュッセルに赴き、当地で講演などをして過ごす。同年12月にプーレ・マラシは、性懲りもなく「禁断詩篇」６篇を含む『19世紀パルナス・サチリック詩集』をボードレールに無断で秘密出版する。翌65年２月、プーレ・マラシは６篇の「禁断詩篇」を含むボードレールの拾遺詩集『漂着物(Les Epaves)』をブリュッセルにおいて刊行する。翌66年３月、ボードレールはベルギーのナミュール市の教会前の石畳の上で倒れ、青年時代に罹った梅毒が原因とみられる脳軟化症の兆しが現れ、まもなく言語障害と半身不髄に陥り、翌66年、症状になんら変化のみられぬままパリに移送され、同年８月31日、カトリ

ック教徒として最後の秘蹟を受けた直後、母の手に抱かれて永眠した。享年46才。遺体はパリのモンパルナス墓地に葬られた。

『悪の華』初版をめぐって

上の略歴にも少し触れたように、ボードレールは最初『レスボスの女たち』という表題の詩集を発表するつもりだったが、いくつかの事情が重なってこの企画は棚上げとなり、1848年11月になると、ある雑誌に『冥府』という題の詩集の予告が出る。しかし、もはや詩の時代ではなく散文の時代だという風潮も手伝ってか、これも結局実現されずに終わり、『悪の華』という表題が日の目を見るのは、1855年6月1日号の「両世界評論」誌上が最初であった。これには「禁断詩篇」は含まれていなかったが、「旅への誘い」や「シテールへの旅」などの重要な詩篇を含む18篇の詩から成るものであり、また「両世界評論」という雑誌は、スタンダール、バルザック、デュマのような有名な文学者が寄稿していたのみならず、人文、社会、自然科学の優れた論文を掲載していた当時のフランス随一の総合雑誌であってみれば、ボードレールのこの雑誌への登場は、良きにつけ悪しきにつけ様々な波紋を引き起こしてもなんら不思議なことではなかった。早速、ある批評家が、詩人としてのボードレールに讃辞を呈しつつ「ボードレール氏がその書物を刊行するであろう時、讃辞よりも多くの批判が彼に向けられるだろうと、私は確信している」と予言した通り、57年の詩集刊行を待つまでもなく、早くもその年の11月には、政府寄りの新聞「フィガロ」紙上に「シャルル・ボードレール氏による『悪の華』」と題する徹底した酷評記事が現れる。この記事の結論を要約すれば、ボードレールが10年来パリの詩壇で天才詩人として通ってきたのは皆が騙されていただけのことで、18篇の詩の発表によって彼の正体が暴かれたというものであり、屍だの怪物だの墓場の蛆虫だのといったおどろおどろしいイメージをあちこちちりばめて人を瞞着するのも、自在な詩的能力の欠如を隠すためだというわけである。この記事に象徴される悪意と揶揄に満ちた批評が、57年の『悪の華』初版発行直後に一層エスカレートした形で「フィガロ」紙に掲載されるのは火を見るより明らかだろう。それでは、なぜ斯くも執拗に「フィガロ」はボードレールを標的にしたのだろうか。この理由を詮索する前に、ここで当時の時代背景を簡単に振り返っておこう。

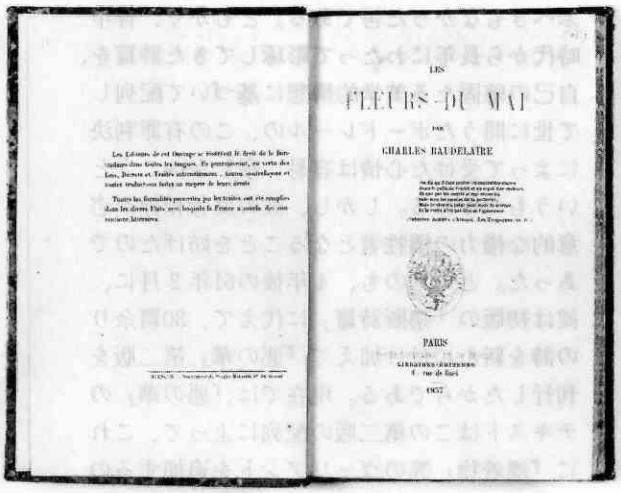
1848年の2月革命は、30年の7月革命の挫折の後、ブルボン王家の血筋たるルイ・フィリップによる緩慢な絶対王政とでもいうべき体制のもとで逼塞させられていた言論に束の間、息を吹きかえさせ、様々な政府的立場をとる夥しい数の新聞が創刊される。しかし同年6月のパリ民衆の蜂起の失敗、同12月のルイ・ナポレオンの大統領選出、51年12月のナポレオンによるクーデター、翌年12月の第二帝政の宣布というように、事態のめまぐるしい推移にともなって、またぞろ言論統制が頭をもたげてくるのである。わけても「1852年2月17日の勅令」は、第二帝政時代の言論活動を徹底的に抑圧しようとするもので、これによって事前検閲制度が確立され、あらゆる出版物に政府の許可が必要となったばかりか、皇帝および政府にたいする批判はもちろん、裁判に関するあらゆる意見表明さえ禁じられたのであった。しかも政府の一方的決定で新聞や雑誌の発刊停止が命じられ、当局から二度警告を受けた新聞雑誌にも同様な処分が適用されたのである。この結果、帝政宣布後わずか数ケ月でパリでは十余りの日刊紙を数えるにすぎない状態となっていたのである。このような時代背景を踏まえれば、「フィガロ」紙が執拗にボードレールを血祭りにあげようとした理由もおのずから明らかとなるだろう。

『悪の華』初版が出る前年の3月に、詩人の死後初めて『全集』を出すことになるミシェル・レヴィ書店よりポーの翻訳集『異常な物語集』を刊行していたボードレールが、その序文の中で、ポーのアルコール中毒による死を「この死はほとんど自殺、久しい以前から

準備された自殺である」と断言し、ネルヴァルの名こそ挙げていないが、彼の自殺を弁護し、「19世紀の叡知が、かくもしばしば、かくも悦に入って繰り返す、人権の数多い列挙のなかで、二つのかなり重要なものが忘れられてきたが、それは自己矛盾する権利と、おさらばする権利とである」と書いた時、既に『悪の華』裁判の有罪は決まっていたのかも知れない。自殺に関する論議はタブーであるのに、それを賞揚するかのごときボードレールは、時の権力にとってみれば、1830年代前半の過激で反逆的なロマン主義の亡霊の復活と映ったに違いなく、かかる不穏分子を野放しにしては体制が危うくなりかねないという第二帝政当局にとって、体制内で延命を計ろうという打算からボードレールを中傷する「フィガロ」紙の記事は渡りに船というわけであった。

『悪の華』が告発される直接のきっかけとなったのは、初版本の発売が始まった直後の7月5日に「フィガロ」紙に掲載された『悪の華』の背徳性をあげつらう記事だったとされている。この記事には次のような一筋が含まれていた。「これほど僅かなページの中でこれほど乳房が噛まれたり、噛みちぎられさえもする例をわれわれは見たことがない。デモンや胎児や悪魔や貧血症や猫や寄生虫のこのようなレヴューに立ち会ったこともかつてない。この書物は、あらゆる精神錯乱、あらゆる心の腐敗に開かれた病院である。」この後、先にも少し触れておいたような仕儀とあい成るわけだが、ここで同じ年に行われたもうひとつの文学裁判を思い起こしておくことにしよう。それは、ギュスターブ・フローベールの『ボヴァリー夫人』が告発された事件である。これは、前年の10月から12月にかけて都合6回、ある雑誌に連載されたのだったが、その内容が猥褻的で冒瀆的であるとの理由で告発され、翌年1月29日にパリの軽罪裁判所第六法廷で公判が開かれた。そして、2月7日の公判で下された判決は、嫌疑は残るものの証拠不十分により無罪というものだった。この無罪判決には、ルーアン市の市立病院長の要職にあった父親の存在と皇后を味方に持っていたことが幸いしたと言われているが、いずれにせよ、同年4月、ミシェル・レヴィ書店から単行本として発売された『ボヴァリー夫人』は、裁判のお蔭で爆発的に売れたと言われている。それに引き換え、『ボヴァリー夫人』裁判と奇しくも同じ法廷で行われた『悪の華』裁判の方は、ボードレールの微かな期待に反して、「レスボス」、「地獄墜ちの女たち」、「忘却の河」、「あまりにも快活な女に」、「宝石」、「吸血鬼の変身」と題された6篇の詩篇の削除と罰金300フランという有罪判決が下されたのであった。以後、この「禁断詩篇」は詩人存命中にフランス本国で発表されることはあり得ない。もし、元老院議員でもあり将軍でもあった義父オーピックが生きていれば（彼は『悪の華』裁判の4ケ月前に死亡）事情は変わっていただろうか。暫く以前から断絶状態にあった二人の関係を考えれば、この可能性は薄いと言わざるを得ない。また「禁断詩篇」の一篇「あまりにも快活な女に」を含む『悪の華』の幾篇かを捧げられたサロンの女主人サバチエ夫人に裏工作を依頼したにしても、彼女の政治力など、皇后のそれに比ぶべきもなかった筈である。ともかく、青年時代から長年にわたって彫琢してきた詩篇を、自己の確固たる美学的構想に基づいて配列して世に問うたボードレールの、この有罪判決によって受けた心情は容易に察しがつこうというものである。しかし、彼の反骨精神が恣意的な権力の犠牲者となることを妨げたのであった。というのも、4年後の61年2月に、彼は初版の「禁断詩篇」に代えて、30篇余りの詩を新たに付け加えて『悪の華』第二版を刊行したからである。現在では、『悪の華』のテキストはこの第二版の配列によって、これに『漂着物』等のヴァリアントを追加するのが常識となっている。もう一つ彼の反骨精神を如実に示す実例を挙げておこう。「断罪された書物のための題辞」と題された詩がそれなのだが、これは当初第二版のために書かれたものと見做されているものである。しかし、

その内容からして第二版に挿入するのは、再び権力の介入に口実を与え兼ねないと判断したのだろう、結局、これは第二版とは切り離されて二、三の雑誌に発表するだけに終わってしまう。少し長くなるが、以下にその全文を引いておこう。「穏やかにして牧歌的なる読者よ、／節制家にして素朴なるまじめ人間よ、／投げ捨てよ、陰鬱の星の下に生まれた／乱痴気めいてメランコリックなこの書を。／狡猾な学長先生〈魔王〉のもとで／きみが修辞学を修めたのでなければ、／投げ捨てよ！きみには何も分かるまい／私をヒステリー扱いするかも知れない。／だがもし、魅入られるがままにならず、／きみの眼が能く深淵に潜ることを得るなら、／私を読め、私を愛するすべを学ばんがため。／苦しみながらもきみの楽園を／探し求めゆく、好奇心の強い魂よ、／私を憐れめ！…さもなくば、私はきみを呪う！」読みかたによっては、初版に対する政府の仕打ちに敢然と挑戦していると取れなくもないこの詩を第二版に収めなかったのは、蓋し賢明な処置だったというべきであろうか。



初版本の見返しと中表紙

ところで、本学中央図書館蔵となった『悪の華』初版本は、全部で1300部刷られたうちの一冊には違いないが、上に触れたような事情から、「禁断詩篇」を完全に含む初版本はそれほど多く残っていないらしく、その意味で真の稀覯書の名に値するものの一つだと言えるだろう。因みにオリジナル本は、表紙にも扉頁と同じ内容（左の写真参照）が印刷されていたが、中央図書館蔵の本にはオリジナル本にあった筈の表紙がなく、代わりに美装丁の表紙が施されており、恐らく無傷の初版本を手に入れたどこかの愛書家が、秘蔵本とするべく美装丁本に作り変えたものと思われる。それにしても、この本がどのような経路を辿ってはるばる本学中央図書館にまでやって来たかに思いを馳せる時、詩人ボードレールの曲折に満ちた実人生が妙に生々しく眼前に浮かび上がってくるのは何故であろうか。それというのも、彼の『悪の華』がなかったならば、マラルメやランボーやヴェルレーヌの詩集も生まれなかっただろうと言われる象徴主義の先駆者としての彼の威光のなせる業なのかも知れない。

（注）上記の引用および作品名の訳はすべて、阿部良雄個人訳『ボードレール全集』（筑摩書房刊）に拠った。

【参考文献】

『フランス文壇史』渡辺一民著、朝日新聞社、1976.
『ボードレールの世界』阿部良雄編、青土社、1976.
『ボードレール手帖』池田正年著、蝸牛社、1979.
『ボードレール全集(I)』阿部良雄訳、筑摩書房、1983.
『ボードレール全集(II)』阿部良雄訳、筑摩書房、1984.
『悪の華』鈴木信太郎訳、岩波書店、1987.

（フランス文学専攻）